

古 本 日 記 抄

「津 國 女 夫 池」

(大 野 書 店 訪 問)

(昭・二三・七・二九)

縁側で新聞を見てゐる處へ、坊やが「ピン／＼(郵便)」と云つて、一束の郵便物を持つて來た。神保町の大野書店の目録の中に「淨瑠璃書類、戯曲叢書其他とり混ぜ」とある一項が目についたので、直ぐに出て、九時、その店に入ると小僧さんが一人居た。目録發行後の一番乗りであつたらしかつた。やゝありて主人出勤、問合はせの電話が連りにかゝつて來た。馬琴朱筆入の「八犬傳」の校正刷が今度の目録中の呼物であるらしかつた。

小僧さんが出して來て糸で結へたと山は、「やまと文範」の内二卷、一巻は表紙の取れた

「巢林子戲曲」二卷が混つて、武藏屋本、文學資料、卅六佳撰等の、凡そ五十卷であつた。

上にあつた武藏屋本から始めて、一冊一冊奥付を見てめぐつて行くと、五六冊目に、

津 國 女 夫 池

が出て來た。數年來尋ねあぐんで、一時は、豫告のみで、實際は出なかつたのではあるまいかと迄疑つたが、合本「近松時代淨瑠璃」(明・二八・一一・二二、第二卷)に、合綴されてゐるので、出たことは確かであるのに、どうしたものか唯この一卷のみが、執拗に出て來なかつたものであつた。「武藏屋考」の書目には唯この一篇のみの日付が「明・二八？」となつて居り、それに宛てた戲曲叢書第廿一冊といふ番號も、外に考へやうがないから、この方はさして不安はなかつたが、さりとて推定は推定であるに過ぎないのであつた。恰も丸善の「學鐙」に頼まれた武藏屋本に關する記事を書かうとしてゐて、その原稿には、何を措いても、書目を記録して、せめて篇目だけでも埋減を防がうと腹案してゐた處に、これが出て來たのであつた。

表紙、地水色、紋様白抜、題簽白抜、題字は赤で「戲曲叢書、後太平記四十八卷目、津國

女夫池」と記されてゐる。奥附は

明治廿八年十月廿日印刷（近松叢書）
明治廿八年十月廿六日出版（第廿一冊）

となつてゐる。（叢書名は、第三冊迄が「近松叢書」で、第四卷からは「戯曲叢書」に改まり、この巻の表紙にもさう書いてあるのに、奥附は「近松叢書」と、武藏屋本らしい粗忽な記し方になつてゐる）。

武藏屋本末期のものであるが、このあとに出た「天鼓、傾城吉岡染」は、所藏にも二三卷重複して居り、今日の一群の中にも、それが見出さるゝほどであるのに、この一巻のみが、今までどうしても出て來なかつたのは、入手した今から考へても不思議である。

手に取つて見れば、型の如き武藏屋本で、何の變哲もないが、さりとては骨の折れた、永い間の探しものであつた。

一巻だけを別に置いて、猶も一冊々々めくつて行くと、三々文房の文學資料第七冊、「御前おとぎほうこ」が出て來た。

御前おとぎほうこ 都の錦著

明・二四・六・二五印刷、同六・二六出版、文學資料の他の巻と同じ装幀であること、いふを俟たぬ。これで三々文房本八巻が揃つたと同時に、武藏屋の西鶴鰯刻影響本の、分つてゐる丈が揃つたことになるのであつた。更に見て行くと、終り頃になつて、何巻かの金櫻堂本の中から、

近江源氏先陣館

が出て來た。想像した如く、追刊の「名作卅六佳撰拾遺」「淨瑠璃全書、第二輯」となつてゐた。日付も「明・二六・一二・二五印刷、明・二七・一・一發行」で、「源平布引瀧」（明・二六・一一・一九）と、「碁太平記白石嘶」（明・二七・四・二〇）との中間になつてゐる。卅六佳撰、三十九巻、四十篇中、唯この一巻のみを缺いでゐたものである。

この時迄まだ獨りで店番してゐた小僧さんに、割高は承知だが、この三巻を分けぬかと談判すると、目錄販賣中は分くるわけに行かぬ、あとから來た人に叱言を云はるゝといふ。そ

んな譯はない、先に賣れたものは、全部でも一部分でも同じことではないか。それが行けなければ残つたこれ丈の嵩高なものは、持つて行く丈でも大變だから、改めて買はぬか、と云つても、目錄販賣が濟んでからなら、と筋の通らぬことを云つて煮え切らぬ。それ迄待てるものでもないから、四圓拂つて、三卷のみを包ませ、あとは一應預くることにした。

午前十一時、歸ると早速消毒箱に容れ、葉山に居る戸板氏に端書を書いて知らせる。

別に目錄で「明治廿年」とあるのが目に止つた

一讀 百驚 珍事 奇聞 第一集

といふを購む。例の小野田孝吾著で、舊藏本は今丸善の社史編輯係に行つてゐるから比較は出来ぬが、内容は全く同じものであるらしい。唯武藏屋本は、明治十七年十一月、著者の自家出版の形になつてゐるのに、これは、前版と沒交渉に、

明・二〇・一〇・二四 翻刻御届

明・二〇・一一——出版

編輯兼原版人

小野田孝吾

芝區片門前町二ノ一

鰯刻出版人

鈴木今作

神田區東松下町二二

鈴木金輔同店

發兌所

金櫻堂

日本橋區通り四丁目八

となつてゐる。「鰯刻御届」「原版人」「鰯刻出版人」等の文字がこの二種の版の關係を説明するやうであるが、それにしてもはつきりした關係は分らぬ。五十錢。

主人と少時話し込む。目錄を見て、電話で送つてくれと云はるゝのは一番困る。(この時電話で、上記の馬琴書入の八犬傳校正刷を送れといふ電話があつたらしかつた)。送つたあとで、態々來てくれる客に斷つて、あとで返して來らるゝと、あとの客に更に送つてや

つても、氣ぬけがするし、他に斷られたといふことが、興味を減ずることにもなる。端書注文は、本屋から云へば、大して熱心でないといふやうに感じて、賣切れたと斷るにしても案外氣兼ねない。一番難有いのば、(お世辭ではないが) 目錄を見て、逸早く店へ來てくれる客で、二十錢でも、三十錢でもうれしいと思ふ。

道樂氣がなければこの商賣は出來ぬ。意識して片寄る譯ではないが、買入るゝ時に、嫌な種類の本は、値が合はぬとそれ迄であるが、好きな本であると、「それではどうすればいいのか」といふことになつて、結局片よることになる。地方に行つて(年に五六回は出掛くが)、快心な本を手に入れ、宿屋で枕許に並べ、錦繪ならば壁に貼り、軸物は床の間にかけて、翌朝起きて、一服しながら、それを眺むる時の氣持は忘れられぬ。

(帳場の近くの棚にある邦樂年表、義太夫節の部を指して)、これは私の参考書です。丸本類は近頃は近松、海音、出雲等の名の通つたものより、無名な作者の、無名な作品の方がよく賣れる傾向がある。著名作品は已に行き渡つたのと、今一つは翻刻ものが多いからで

あらう。

午後、消毒箱から出し表紙の裏打ちなど多少の糊細工をした後、三巻を机の上に並べて眺め入る。永い間、或時は夢にまで見て、近頃では、到底見込はないと諦めてゐた「津國女夫池」であつた。この一巻のみが今迄見付からなかつたのは、單なる偶然の廻り合はせであつたらうか。よくあるやうに、一度手に入ると、引續き出て來て、何だ、こゝにもあるといふことになるのではあるまいか。

卅六佳撰の方にしても、探求した時間から云へば短いが、その間に、追刊三巻のうち、最後の「白石嘶」は、所藏にだけでも二部あり、今日の大野書店の一堆の中にもそれがあつたやうに、いはゞざらにあるのに、「布引」は武藏の一巻以外には見たことが無く、「近江源氏」は今日始めて、寓目したのである。それも偶然であらうか。「御伽ほうこ」に至つては、注意したのが最近のことで、それ迄は見のがしてゐたのかも知れぬが、三々文房本の中でも院本ものはさらにあつて、西鶴の二巻とこの巻とは少いやうである。何かの理由があるので

はあるまいか。

何にしてもうれしい。「津國女夫池」と、例の優雅な達筆で書いてある表紙の題字をちつと見てゐると、嘘ではないかといふ氣がする。大野の主人の話ではないが、この夜は三卷を枕もとに置いて寝る。